



見聞録 5

bootleg-books

「こーら」

突然下から声を掛けられ、脚立の上でぼんやりと落ち込んでいた俺は、「うわああっっ！！」思わず飛び上がってしまった。

脚立から落っこちそうになって無茶苦茶慌てる。

「...落ちっ！落ちっ！！んんっっ！！」

ヘンな格好で脚立にしがみついたままの姿勢で声の主に視線を合わす。

「...お姉さん」

「岡野くーん、ダメでしょ、ぼんやりしてちゃ。コウイチと幹線合流するんでしょ？だったら午前中にダウンライト全部回らないと」

「すみませんっ」

謝る俺をじっとお姉さんが見上げている。

「...どうしたの？」

姉弟って...顔だけじゃなくって言うことも似てるんだな...って思って...焦った。

「い、いえっ。...何でもないです。すみませんでした」

ぺこりと頭を下げると、お姉さんの眉が少し動いた。

「ねえ岡野君、先刻のお休み時間の時にはコウイチがちょっかい出してたから放っておいたけど、仕事中にぼんやりするのは良くないよ。危ないよ」

「...はい」

お姉さんが困ったような笑顔を見せる。

「んー...どうしよう」

「え？どうしましたか？」

「岡野君」

「はい」

「あたしの言ったこと、多分心に届いてないね」

「あ、いえ、そんな」

「んーん。届いてないよ」

お姉さんは俺を脚立から下ろさせ、そのままベランダに引き摺り出した。

「ね、ちょっと良い？」

「...はい」

「あ、その前に。...はいっ」

手の上にカン口飴を乗せられた。

「甘い、苦手？」

「あ、いいえっ」

「じゃ、どうぞ」

「.....ありがとう...ごさいます」

俺が大きな飴玉を口の中に放り込むのを確認すると、お姉さんはベランダの手摺に寄り掛かって俺の方に顔を向けた。

「ね、岡野君、この仕事にはもう慣れた？」

「...ええ」

「そっかー。そうだよ。随分慣れたよね。もう一人で取り付けさせてもらってるんだもんね」

「いや、でもダウンライトですから」

「あら、ダウンライトって几帳面な性格の子にしかやらせないのよ。あの二人」

「そうなんですか？」

「岡野君は器用なのね」

「いえ、そんな...」

「謙遜することないよ。前の仕事はどうだったか知らないけど、現場仕事に限って言えば、自信を持って言えることはきちんとアピールしなきゃ」

「.....そう...ですね」

「まだ、自信無い？」

「.....はい」

「...そっかー」

「すみません」

「そんな、あたしに謝ることないよ。...そっかー。まだ自信持てないかー。岡野君は理想が高いんだねえ」

「そんなんっ...理想なんて高くないですよ」

高い訳ない。

高かったら、働ければどんな仕事だって良い、なんて思ったりしない。

「ねえ、岡野君」

「はい？」

「あたしはね、こうやって今みたいに一人で回らせてもらえるようになったのってね、この仕事手伝うようになってから五年も経ってからなんだよ」

「.....でも...俺、一人で回らせて貰っているって言ったって、こんな仕事ぐらいしか...」

「そう？でも、仕上げ仕事任されるのって、スゴいことだよ？電気工事って部屋内の仕上げは大体が他の業者が仕上がってからじゃなきゃ出来ないでしょ？業者さんによってはもう現場から引き上げているのもいるよね？ね、もしここで壁とか天井とか傷付けたり汚したりしたら、岡野君は元に戻せる？」

「...いいえ。出来ません」

「でしょ？コウイチもお父さんにも、谷田君や、あたしだって出来ないわ。だってあたし達は電気工事士だけどボード屋でもクロス屋でもないもの。あ、じゃあ岡野君、問題ね。もしもクロス屋さんがこの現場から引き上げた後に、この照明の取り付けに失敗して、この天井一面全部張り替えになったらいくらぐらいかかりますか？」

天井のクロス張り替え？

.....1メートル四方だったら...クロス屋さん、壁紙ガンガン捨ててるし。張るのもここだったら変形無しの長方形一枚ものだから.....普段だったらお願いすれば直ぐに直してくれる程度のモンだし...んー.....でも...引き上げちゃってるって言うんだったら...きっと高いだろうから.....。

「.....五千円くらいですか？」

「ハズレ。その倍は取られちゃうんだよ」

「えーっ？！」

「ビックリでしょ？作業ってね、単価の問題じゃないの。問題は人件費。それから装置だって必要だしね。引き上げ前で、現場で作業している最中においてお願いするんだったら缶コーヒー一杯程度の補修なんだけどね」

「高いんですねえ」

「ふふっ...これでも安くなったのよ。バブルの頃は安いところでも今の3倍は取ってたからね」

「へえ...」

あんな...って言っちゃ悪いんだけど、あんな仕事がなあ.....。バブルの時には三万円かあ....、すごいなあ。

「あ、岡野君、今『あんな仕事なのに』とかって考えてたでしょー？」

ぎくっ。

「あ、いえ、あのっ」

「クロス屋さんってものスゴい技術職よ。本当に上手い人なんて、何年経っても壁紙の繋ぎ目を分からないように仕上げられるんだから」

「.....すみません」

「ま、とにかくね、それくらい他の業者の仕事って言うのは、追加や補修で頼むと大変なの。だから、お父さんもコウイチも信用出来ない人にはどんなに器用な人でも、絶対に仕上げの仕事はさせないのよ」

...そう言えば、たまに仕事が忙しくて派遣呼んだりした時に、エラく器用な奴が来ても、絶対に梃子（注。テコ・助手のこと）しかやらせないかも...

「確かに。...でも...やっぱり俺、自分の仕事に自信は持てないですね...」

「もっと重要な仕事とか任されないとダメ？」

「.....いえ...そんなんじゃないんです。...ただ...なんか.....俺.....ダメなんです」

ガリッ、と口に入れていた飴を齧る。

懐かしい甘い味が広がって。

でも、気持ちはとても苦くて、辛くて。

「...ダメなんです。俺、夏からずっと通ってるのに、まだ何やってるのかも全然分からなくて」

「何が？」

「.....全部です。全体の進行具合も何もかも。だから...次に何をやれば良いのかも分からないし。足りないもんも仕事の予測も、業者との絡みだって全然...。ミーティングの時だってそうです。俺が話せることって言ったら...今やってる仕事の進行具合の報告と...後は電材の保管場所ぐらいしか――」

「それで良いのよ」

凄くしっかりした口調だった。

優しい感じとかそんなじゃなくて。凄くしっかりした...まるで...親方みたいな口調で。

心のどこかで慰められるんだろうなあ、って思って、ソレを密かに期待もしていた俺は、あんまり意外なお姉さんの口調に思わず顔を上げて目を合わせてしまった。

お姉さんは真っ直ぐに俺を見詰め返して、それからゆっくりと言ひ聞かせるように言葉を続けた。

「それで、良いのよ。岡野君は自分のことを良く知っているわ。だからいい加減なことはしないし、やらない。こういう仕事では一番大切なことよ。誰でも自分をよく見せたいから、見習いの人達って必要以上に喋りたがるし、やりたがるわ。でも、それってとっても危険なことなの。命に関わる仕事だから。能力の限界を知ることって本当に大切なもの。お父さん達の目は確かよ。あたしが保証する。だから一人一人の能力にちゃんと見合った仕事を言うの。その『言われた仕事』を百パーセントこなせて初めて信用って生まれるの。岡野君はお父さん達からしっかり信頼されているわ。間違いない。それにね、報告も在庫管理も大切な仕事よ。『それしか』なんてこと、ないよ」

「.....でも...」

「あのね」

お姉さんは悪戯っぽく笑って続けた。

「報告と在庫管理の能力は、間違いなく高野電気工事の社員の中では岡野君が一番よ」
笑いながら。

でも、すっごく真面目に。

「必要以上の自信は危険だからいらないわ。でも、最低限の自信は必要よ」

「.....」

「...ね？」

「.....はいっ」

.....最低限の自信。

確かに俺は前の仕事をリストラされてから、自信って何もかも失っていた。

何をやってもダメだって言われるような気がして。

自信がある顔をしているとバカにされるんじゃないかって。

不安で...不安で。

だからって、気の利いたことの一つも見付けられなくて。

自分に言いつけられた仕事をこなすのが精一杯で。

...なんか、不思議な感じだった。

本当に、本当に少しだけ。救われたって言ったら大袈裟かもしれないけれど。

お姉さんの言葉は俺に自分の中の『自信』を見付けさせてくれた。

「.....ありがとうございます」

ちょっとだけ、泣きそうだった。

お姉さんは「どういたしまして」って言いながら、すごく優しく微笑っていた。

ふっ...と、の中のカン口飴の最後のひとかけらに気が付いた。

飴、美味しいですね。って、言おうと思って口を開いた...ところで、いきなりバシーンッッ！

！と、お姉さんに背中を思い切り叩かれた。

「痛いっっ...」

「ほらっ！！コウイチ達待ってるわよっ。手伝ってあげるからっ。ダウンライト、一気に片付けるわよっ！！」

大きな声で喝をいれられる。

「はっ、はいっっ！！」

背筋がビシッ！と伸びたの、なんだかスゴい久し振りだ。

それにしてもお姉さん...見掛けによらず...馬鹿力ですね...っ....

絶対に背中にモミジ、出来てるに違いない、

見聞録 5

<http://p.booklog.jp/book/36768>

著者 : bootleg-books

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/bootleg-books/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36768>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36768>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.